

粘土

田村 一二



精薄施設で粘土細工をやらせんような施設はもぐりだという
ようなことを言つて来た手前、昭和三十六年に一麥寮を開設し
たとたんに粘土細工の作業場をつくることにした。

つくるといっても予算をとつて業者にやらせるのではない。

電気と窓は頼んだけれどもその他は全部職員と子どもとの合作
手づくりである。水道も手前でやった。もつとも水道といつて
も、四百メートルほど山奥の池からビニールパイプでひっぱつ
て来ている手製の水道だから世話はない。この水を引く工事も
殆んど私がやったが、モーターも何も使わないで水が一旦上に
あがつて土手をこえて流れていくというサイフォンの理を使つ
ただけなのに、それが近くの百姓のおばさんにはどうしてもの
み込めず、まるで私が魔術でもつかつているかのように、畏敬
の念をこめて私の顔を見てくれたのは愉快であった。

そこで作業場だが、山から丸太を切つて来て皮を剥いで柱と
し、子どもたちがつくつたセメントレンガを積んで壁とし、屋

根はトタンで葺いた。中心になつてやつたのは私と就職を前に
したHという子どもの二人で、あとは必要に応じて他の職員と
子どもたちが参加をした。雨の日と出張の日を除いて、地下足
袋をはかぬ日はなかった。そして、丸一年かかつて二十七坪の
粘土細工作業場は完成した。

この間、私のHへの仕込みは酷しかった。特に材料を勿体な
い使い方をした時、道具の使い方が乱暴な時、道具の後始末が
いいかげんな時、こんな時は目の玉がとび出る程叱りつけた。
はじめの頃はよく泣いて帰つて保母に慰められたものである。
ところが面白いのは、いくら怒鳴られても泣かされても、必ず
毎朝まだ私が寝ているうちに窓を叩いて、今日は仕事をするか
ときく。するとうとうよっしゃつと答えて作業場へとんでいっ
て、材料や道具の準備をするのである。

出来上つた作業場を見た者は、満洲人の小屋だとか、あれで
軒下に赤トンガランでもぶらさげたらメキシコの納屋をつくり

だとか、まあいろんなことをいった。しかし私は全然平気であった。私自身もその通りだと思っていたし、素人が業者そのこのけの仕事をしたら、業者の立つ瀬がなくなてかわいそうだと思っていた。だがそれよりも何よりも、一年間師弟同労で流した汗を私は見ている。そして例えば、先生と子どもが天秤棒でもっこを担ぐ時、子どもは前、後の先生はちゃんともっこを手前の方に引きつけて重みを自分の方に向け、子どもの歩みに足を合わせている。次にその子どもが自分より小さい子どもと担ぐ時、ちゃんともっこを自分の方に引きつけて、小さい子の歩みに自分の足を合わせている。「思いやり」ということが、天秤棒を通して先生の肩から子どももの肩へ黙ってしみこんでいることを、この目でしっかりと見ているからである。

とうとう粘土細工のできる時が来た。この一年を子どもたちもわれわれもどんなに待ったことであろう。

先生たちも大張切りで、さっそく子どもたちに粘土細工を「教えようとした。それに私は待ったをかけた。水をぶっかけたわけである。子どもたちには前掛けをさせて、その前によく練った粘土を置くこと、それ以外何もしてはいけない、放っておくのだといった。

これは先生方にはショックであったらしい。真面目な先生程

教えたがるからつらいことであろう。案の条すぐ先生がとんで来た。子どもたちが粘土を舐めたり食べたりする、どうしようといっておろしている。かまわん放っておきなさい。不味いものをそういつまでも食べる筈がない。たとえ少々腹にはいってもなんでもない、腹の掃除になるだろうといって笑ったら、先生もほっとしたような顔をして作業場へ帰っていった。またすぐやって来た。粘土を頭に塗ったり顔に塗ったりして、きゃあきゃあいって喜んでいうのである。放つときなさい、あとで洗ってやればよい、あれは美容によいらしいからあなた方もやってみたらどうだといった。逃げた。その次の時には、粘土をちぎって土間に落として喜ぶ、投げ上げて屋根のトタンにくっつくのをそれこそ驚異の目で見つめていうという。この頃になるともう先生方は、また放つとけでしようといつて帰るようになった。子どもたちも先生たちも益々有望である。有難いことだ。しかしそれにしても、粘土といえはわれわれはすぐ何かを、それもなんであるかわけのわかるものを作らなければ承知しないし、それだけしか知らなかったのに、この子どもたちは粘土を舐めてみる、塗ってみる、落としてみる、投げ上げてみる、粘土には思ひもかけぬ多くの効用があったことを教えてくれたのには驚嘆した。

そして一か月半程も「待つ」たであろうか。子どもたちは粘土を叩いて凹ませ、押して伸ばし、ちぎってくっつけ積み上げはじめた。子どもたちの粘土細工への意欲は猛烈な勢で噴出しはじめた。現在一麦寮長をしている吉永君などは、食事時になっても子どもたちが作業場から出ないので、何度頭を下げて頼んだかわからないといって笑っていた。私も時々夜遅く外から帰って来て、作業場に電燈がついているので、はて消し忘れたかなと思つて覗きに行くと、二、三人の子どもがバジャマ姿のまま（一度寝てからまた目をさまして部屋を抜け出して来たらしい）世にも嬉しそうな顔をして粘土細工をしているのを見ることがある。

教育とは「意欲の発生」だと教えられたことがあるが、これは正にその姿である。その意欲が子どもを粘土ととり組ませ、そのとり組みによつて子どもは自己の判断力を鍛えているといつてもよい。即ち小林秀雄氏の「判断力とは精神と事物との衝撃による弾性である」ということばの如実の姿ではなからうか。

こうした子どもの姿をみると、私には七人の孫がいるが、その中の一歳から三歳ぐらゐまでの連中が、母親その他大

人共の、お膳立て、干渉、先廻り、指導を排除して、周囲にあるあらゆる事物に対し、舐め、噛み、掴み、投げ、引っぱり、叩き、抱きつき、突撃し、そして転び、ひっくり返り、ぶつ倒れて泣きながらなお止めようとしなない。この逞しい姿から人類は原初において教師がおつて教え教えられたのではなくて、この幼児やちえおくれの子どもたちの解放された姿に見られるように、自己の意欲によつて、自己周辺の事物に体（精神）をぶちつけることによつて、判断力という精神の弾性を獲得し高めていく。「自己教育」があつたのではないかと考えるのである。

自己が自己を教育していこうという根強い意欲がなければ、幼児が泣きながら、転びながらなおかつ大人の手助けを排除しようとすることや、ちえおくれの子どもたちが、それこそ寝食を忘れて粘土細工に没頭しようとするあの姿は出てくる筈がない。

この意欲の根強さは、それが人類の「底流」につながっているからであらうし、とすれば幼児の遊びも、ちえおくれの子らの粘土細工も、それは「底流」の「流露」であると見られぬことはない。

この底流はわれわれにもひとしくある。だからこそ、幼児のなぐり描きと見える中にすばらしく美しい強い線を発見して目

を見張り、ちえおくれの子らの粘土作品にかわいさ、和やかさ、淋しさ、悲しさ、不気味さといったもの、凝固した凄さに驚嘆することができるであろう。

だがしかし、それではなぜわれわれには、そういう美しく力強い線が描けず、そういう凄い粘土作品ができないのであろうか。あるいはかつてはそうであったのに、今ではどうしてそれができなくなったのであろうか、そういう疑いが当然出てくる。これはわれわれ教育者がひとつしっかりと考えてみる必要がある。これは単に美しい線がひけるとかひけないとか、すばらしい粘土作品ができるとかできないとかの問題ではない。人類の生きざまの逞しさを養う根源の問題として受け止めなくてはなるまい。

しかもこの流露はすべて「遊び」の形態をとってあらわれ。この辺にも遊びと勉強を全く別ものとして考えているいわゆる「教育熱心」なママや教師を誤らせる落とし穴がある。

遊びと勉強については、九州大学教授井野正人先生の「勉強と遊び」(昭和三十六年六月号『教育と医学』所載)をお読み頂きたい。

さてここで、今まで書いて来たところをまとめてみるつもり

はない。まことに横着でずるいやり方だが、お読み下さった各自がそれぞれの立場で、何か、どこからか掴んで下さればありがたいと思う。

というのが、これは一麦寮のちえおくれの子どもたちとの粘土につながる取り組みと、私の孫どものお守りをしている時に見た狭い世界から私が教えられたことを書いたので、それがそのままいろいろの立場の読者のみなさんの参考にはなるまいと思う。特に入字式がすんだらもうその次の日から、相手がどんな子ともかわかりもしないのに、何かを教えなければならぬという現在の幼稚園や学校の現場機構では、一麦寮でやって来たようなことは夢のような話であり、別世界のことであり、唐人の寝言に過ぎないであろう。

しかし同時に、これは現在日本の一隅であったまぎれもない事実なのだから、その中から掴もうと思えば何か少しでもあるかもしれない。若しそうなれば、一字一字原稿用紙の枠の中にはめこんでいくという面倒な仕事をした甲斐はあったと思う。

一麦寮の粘土作品は、吉永寮長が中心となって写真集『ゆげやき』として出すよう今編集作業を続けている。『ゆげやき』というのは「遊戯焼」のことである。出たらまた御覧頂きたい。